

No.3121

中央アジア出土東ローマ帝国貨幣の基礎的調査

筑波大学図書館情報メディア系 助教  
村田 光司

本研究は中央アジアを対象に、(1) 未だ基礎的調査の行われていない現地での東ローマ(ビザンツ)帝国貨幣の出土状況を調査・整理し、(2) 前近代中央アジアの一地域における東ローマ貨幣の利用形態とその東西交渉史上の意義を明らかにすることである。

本研究は2019年度及び2020年度の2年計画であったが、コロナ禍を挟んで研究期間は2022年度まで延長された。2020年度には、前年度のキルギスでの現地調査結果をまとめつつ、年度末に外部の研究者を招聘してワークショップ「前近代中央アジアにおける文化の交流と非交流」を開催し、中央アジア史研究における貨幣史料の位置付けと有用性について議論を行った。一方で2020年度にはウズベキスタンとタジキスタンを調査する予定であったが、これについてはコロナ禍がやや落ち着きをみせた2022年度後半に実施できた。タジキスタンでは、ペンジケント博物館において所蔵との報告がなされていた東ローマ貨幣数点の調査を行ったが、残念ながら現在の所蔵先を突き止めることはできず、出土したペンジケント遺構の現地踏査を行うに留まった。一方でウズベキスタンでは、タシュケントおよびサマルカンドにおいて未報告のローマ・東ローマ貨幣(ないし模倣貨)の存在を確認し、また当初より調査予定であったものについては実物の計測を行うことができた。

以上の現地調査を踏まえて、代表者は中央アジアにおける東ローマ貨幣・模倣貨・ブラクテアトの分布と意義について総括的な論文を執筆中である。またその副産物として、中央アジアにおける東ローマ貨幣・模倣貨・ブラクテアトの新たなカタログを作成した。ここでは、従来のカタログを大きく更新するとともに、そのカタログではまったく掲載されていなかった図版を可能な限り集め視覚的な貨幣の比較を可能にしたことで、今後の研究の基礎となることが期待される。